

猫から始まる優しさ

金仁苗

教育学部 交換留学生 中国

日本人は猫が好きということで有名です。和歌山と私の縁も猫から始まりました。

二年前、私は旅行しに初めて和歌山紀の川市にきました。私が一番印象に残ったのは、その優しさ、穏やかと美しさでした。人影もいない道で歩いて、騒がしくなく、鳥の囀り、風の吹く音と隣の箱庭に立っている翠色な松の葉擦れしか聞こえません。それに、いくつか猫の鳴き声も耳にしました。



貴志川線貴志駅に一匹の年寄りの三毛猫がいる——その名前は「たま」です。昔たまちゃんの母親は野良猫で、ある優しい女将に拾われて、たまちゃんを産みました。その後貴志駅が代わりにたまちゃんを飼うようになって、たまちゃんを駅長にしました。それは流石に前例のないことでした。それでも、全部の人の注目と世話のもとで、たまちゃんは誰にも気づかないはずの野良猫から威風堂々たる駅長様になり、この駅を守るとともに和歌山の人々達に守られています。そこで、私は初めて和歌山の人と他の生き物の親しい間柄と小さな命に対するその優しさを感じました。

二年経ってから、私は留学するためにもう一度和歌山に来ました。様々なサークルとクラブの中で私は一目で「ねこねこねこ」というサークルを気に入りしました。猫が大好きな私は深い興味を抱いていて、一体猫たちとどんな出会いが出来るかなと思って、このサークルに参加しました。

和太でたくさんの可愛い猫さんが暮らしています。異なる体つき、異なる毛色、異なる性格によって、それぞれの名前が付けられています。それはこのサークルを始めた際に、私を驚き喜ばせたことでした。これらの猫さんたちが名付けられるということは、もう帰り場所もないひとりぼっちな野良猫ではなくて、和歌山大学の大家族として受け入れられたということなのです。この小さな山の頂上で暖かい陽光に照らされ、鮮緑な林木に抱かれている和太の一員になるのです。太い子はデブ、茶色の子はサビ、短い尻尾が付いているのはタビ、真っ黒なのはクロ。それぞれの名前がこれほど彼たちの特徴に似合うのは、まるで母が自分の子供に与える愛称のようです。放課後の頃、夕焼けに染まった木の下で、猫たちの名前を呼び、頭や背中をなでなでしてあげて猫ちゃんがいい心地でゴロゴロする鳴き声を聞いたり、またはあなたの足元にすりすりしてくれるのを感じたりすれば、あなたの心も必ずこの親密のため柔らかくなっていきます。

サークルは皆の都合により午前番と午後番に分かれて猫の餌やりをします。先輩たちはキャットフードと茶碗も用意しました。餌やりの時間になると、キャットフードを持っていてキャンパスのあちこちを探します。見つけたら袋を揺らせば、猫ちゃんにはにやんにや

んと近付いて朝ご飯や晩ご飯をねだります。私にとって、このように学校の猫を飼い猫として扱うのもとても珍しいことです。中国では野良猫は自分で三食を解決しなければなりません。彼たちはどこかでいじめられたようで、人を全く信じず、人を見るとすぐ遠くまで逃げます。しかし、和犬の猫達は人類を信頼したり、近付いたりしています。それはこれらの人から必ず満腹と優しさ、そして親切をもらったからでしょう。

たくさんの猫の中に、他の子と少々違う、とある猫がいます。その子の名前はサビ。全身



の黄色や茶色や褐色の毛が混ざっている三毛猫です。毎日、私はラインのサークルグループから「今日薬あげましたよ」というメッセージを受け取ります。次第に気になってきた私はこの子のことを聞いてみました。実は、サビは心臓に病気があって虚弱な猫だったのです。このように薬で命を支えなければ、もうとっくに亡くなっているというのです。ここまでの愛憐と配慮に感動させられた私は心から感心するようなり

ました。お腹いっぱいさせるだけでなく、先輩たちのこの愛情は命の救済にまで及ぶのです。私が今でも覚えているのは、先輩が「必ずサビに薬をあげることを忘れないでください」と言ってる時の真面目な顔と、私にサビの病気を説明する時の文字の一つ一つに部長の思いや決心があふれていることです。これら全てのことが、儚い命に対する皆さんの思い遣りを私に見せてくれました。思う度に、感動させられたり、励まされたりします。小さいな命に心遣いをするのは優しさの始まりです。和歌山で生活を送っている私は色々な場でその心遣いを感じています。例えば、寮の事務所の通知欄のところに貼ってある目の不自由な方のための盲導犬寄付募集ポスト、国際交流ビルで目の不自由な方が階段を確認できるためのアナウンスなどです。それに、留学生として異文化交流で知り合ったペア先生に色々なことを教えていただいたり、教育学部の先生のおかげで日本の小学校を見学する機会をいただいたりした体験も、私が和歌山で感じた「情」深い心遣いでした。昔と変わらず、これまで和歌山が私に残した印象は、その優しさ、穏やかと美しさなのです。

